

武部貴則准教授は人工多能性幹細胞(iPS細胞)

を活用し、「臓器再生」の研究開発に取り組んでいた。

もともと臓器移植とい

う医療技術への憧れを持つて医学部へ入学。転機にな

つたのは、医学部生の最終学年時、トレーニングのため訪れた米国の移植医療の現場で目の当たりにした実態だった。

移植医療が盛んな米国で供給が絶対的に不足しており、年間約1万人の患者が亡くなっている。「実際の移植医療の現場はとても悲惨なものだった。こうした状況に衝撃を受けてからは、研究医のキャリアを選択し、臓器移植に代わる治療として、いまだ救えない多くの患者を助けるための再生医療の実現化を目指す研究を進めてきた」

2011年5月、独自の初の研究成果は13年7月、

未来医療への懸け橋

市大先端研究

■21■



武部貴則
准教授

臓器再生

iPSで世界初の成果

式を変え、ひいては病のない社会を実現するためのム

ークメントをつくり上げたい」と、新たな予防医学の実現にも意欲を示している。

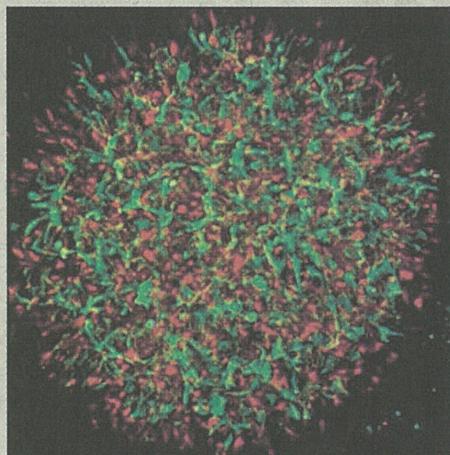
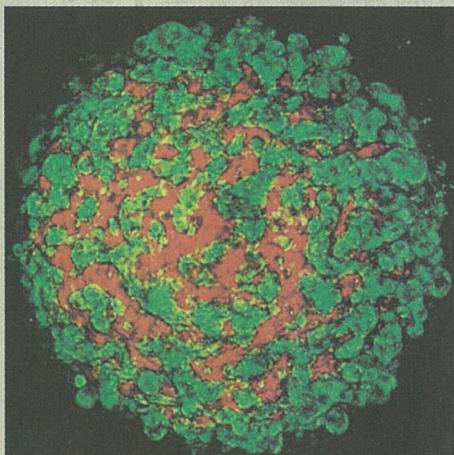
(臓器再生医学)

IIおわり

iPS細胞からヒト肝臓の原基(臓器の種)を誘導することに成功!

緑-iPS細胞 赤-血管細胞 色なし-間葉系細胞

色なし-iPS細胞 緑-血管細胞 赤-間葉系細胞



Takebe, T, et al. Nature, 499 (7459), 481-484, 2013